

私は、自分の教育活動の中で、大きく分けて二種類のルーブリックを使用しています。その二種類とは、主に授業や行事企画の中で生徒自身が評価（自己評価）を行うルーブリック（①）と、動画の中でお話しさせていただいている主に定期考査の試験前及び試験中に配付するルーブリック（②）です。以下、①、②の順に説明いたします。

①こちらは、ジグソー法を用いた授業におけるパフォーマンスを自分でもあるいは周りの人（同じグループの人や先生）からでも短時間に記入できるように作成したものです。評価項目は5つ、評価点は2点、1点、0点の3段階と非常に単純化してあります（合計10点）。このようにすることで、自分でも評価しやすくなっています。この評価を自分で行うことは、点数それ自体の正確さよりも、自分で評価することで、自分にはどこが足りなかったか、どこを意識してやっていたか、どこができていたか、など振り返るリフレクションの機会になることを狙っています。それを周りの人に評価してもらって、そこについて意見交換するのも自分が気付かない長所、短所が見えるようになり、いい学びが得られると期待されます。

このように、授業（行事）の方式や目的に合わせてできるだけ単純化した項目を立てて、自在に作成することができます。目的は、生徒（子ども）たちの学びを促していくことだと思いますので、点数のことよりも「どのような項目を立てれば目の前にいる生徒（子ども）たちの成長に資するかを意識して作ればよいものができる」と考えて作成しています。

②高校1年生と高校3年生の現代社会の定期考査時のルーブリックです。定期考査実施前に配付する形をとっています。このことは、「どのように学べばよいのか」について、生徒自身に「学び方」を意識して学習することを求めていることになります。

ここで、注意していることは、出題を細かく区切り、採点を単純化することです。これには二つの目的があります。一つは、生徒にとって学習をしやすかつ答えやすくすることです。それぞれの問いで回答する内容が、具体的でわかりやすくなります。もう一つは、採点がしやすくなり採点にブレが生じなくなるということです。このことは生徒からみて、我々担当の先生（採点者）に対する信頼感が大きくなります。

私は、基本的に、各問を5点配点としています。1問につき尋ねることは一つ（または二つ）とし、問に関しては、授業を受けた人ならば誰でも同じように意味を受け取ることができるように意識して作成します。各問内容面では4点で三段階としています。すなわち、4点、2点、0点です。さらに残りの1点は表記（表現）の仕方に充てています。漢字の間違いや字数の制限に関する得点です。これは、最大で1点ですので、漢字の間違いなどはいくつあっても1点失うだけとしてあります。それは、「ここで重要なことは内容なのだ」と生徒たちに伝えたいためです。

このように、ルーブリックの中に、学びの方針や学び方をふんだんに織り込むことができます。そして、担当の先生の「思い」がここに込められることになります。

どうぞ、先生方もそれぞれに工夫されて使ってみてください。きっと生徒からの信頼度が上がります。